Marionette～操り人形～

山本　蓮季

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｍａｒｉｏｎｅｔｔｅ～操り人形～

【Ｎコード】
Ｎ１９３２Ａ

【作者名】
山本　蓮季

【あらすじ】
悪魔と契約した女、リリア。契約の、１３人の生贄。１３人目を捧げた時、何かが起こった。そしてリリアは、悪魔によって異次元へ召還される――！！全てはあの人を救うために――。

序章　Marionette

私は、悪魔と契約した。だから私は殺すのだ。

――あの人を救う為に……。

そしてまた、一人の命が奪われる。あの人の為に――。

夕日差す森の中、一人の女と、その向かいには、座り込んで、震えている男がいた。

「ねぇ、お前。あの人の為なんだ、協力しておくれ」

鈴のような声で女は言う。長い黒髪が、風に靡いて、まるでそれは、羽を落とされた天使のようだった。持っている剣を、男の喉元に突き立てる。

「……俺はっ、嫌だっ……。見ず知らずの奴なんかに……！」

女が剣を突き出した。

「見ず知らず……？」

女の顔色が変わった。その矯正な顔には、凄まじい怒りが湛えられている。

歯を食いしばって、顔が歪んだ。

「お前が……っ、お前が殺したくせに……！あの人を追い詰めて！！」

女が剣を翻した。男の喉元から、深紅が噴きだした。

男が何か喋ろうとするが、ゴボ…と音がするだけだった。

女は、血の付着した剣を、天に翳す。そして、言った。

「これで…13人だ。お前との誓いは果たした……！あの人を解放して！！」

空から…地から、どちらともつかないが、声がした。

「そうだな…いいだろう。お前も…アイツも、別の世界に解放しよう」
顔が、青ざめた。
「そんな…聞いてない！！」
世界が、曲がる。気持ちが悪くなって、女は目を閉じた。
腕が引っ張られるような、そんな感じがした。目を開けて、そちらを見ると、
あの人がいた。あの人は笑って、女の腕を摑んでいた。
「う…あああああぁぁぁぁ！！！！」
けれど、女は恐怖した。
”あの人”の後ろにはアイツがいたのだ。女がさっき殺した、アイツが。
女の意識は、そこで途絶えた。

、

第2章　目が覚めると

目を覚ますと、私は何やらフカフカした所に寝ていた。
頭の方にも、そのフカフカが積み重ねられ、体の上には、サラッとした布が掛けてあった。
「ここは……？」
ここがどこだかわからなかった。考えても、何もわからない。
見回してみると、周りは真っ白で、私の後ろには透明な壁があった。
危うく顔面からぶつかる所だったから、少し警戒気味だ。
それに――
「私…どうしてここに？」
記憶が……ない。ただ思い出すのは大切な人がいたことと、自分の名前だけ。
私の名前は…リリア。
刹那、凄まじい殺気を感じ、鳥肌が立った。
「熱…い……っ！！」
手の甲に、痣があった。それは鳥のようであり、また、剣にも見えた。
甲が、熱かった。まるで、業火で炙られているみたいに。
私は手首を＆ａｍｐ；＃２５６８１；んで、ぐっ、と力を込めた。
手が、真っ赤に染まる。
しばらくそうしていた。真っ赤な手は、徐々に白く、青く変色していく。
手を離すと同時に、熱さは消えた。手の色も、元に戻りつつあった。
痣は消えない。だが、熱くなくなったのでとりあえずホッ、と一息つく。
「ん……」
右隣で声がした。
今まで、自分のことしか見えなかったが、ことが収まってみると、

両隣には木で作った
寝床があり、男が2人、それぞれの寝床に転がされていたのだ。
男が目を開ける。
「……」
私と、目が合った。じぃ…と、睨み合う。
まったく、分からない。
第一、こいつはなんでこんなところにいるんだろうか。
「あんた……、誰？」
「私が聞きたい」
お互いに、何も覚えていないようだ。となると、期待は左の男だ。
私は、何か覚えていることを願った。
「ところで。お前、名前は？」
私は男に尋ねた。
「名前…なんだっけかな。たぶんバティスト、だ。バティとでも呼んでくれ。それしか覚えてない。というか、お前さ、名前を聞くなら、普通自分から名乗れよな」
バティストは肩をすくめた。確かに、自分が名乗らないのは失礼に当たる。
「すまない。つい…な。私は……リリア。バティ、お前良く喋るな」
私は飽きれた。こんなに喋る奴は他にいないだろうと思った。
「そうか？そんなに喋ってないと思うぞ、俺は。お前が無口なだけなんじゃないのか？」
「そんな分けない。バティが喋りすぎなんだ……多分」
不安になった。バティが言っている通りかも知れない。
私は……無口なのか？

第3章　外

そうこうしている内に、3人目の呻き声が聞こえた。
リリアとバティストは、男に視線を向けた。
亜麻色の、サラリとした長めの髪が、汗で首に張り付く。
「ここは……？」
リリアは、はぁ…。とため息をついた。
そして目頭に手を当てた。
「こいつも覚えてないのか……」
男が振り返った。その顔には？マークが浮かんでいる。
バティストは落胆し、リリアは失望した。
「やっぱり……。ところで、お前の名前は？私はリリアだ」
さっき学んだ、というか、思い出したことを踏まえて、にリリアは聞いた。
男は少し考えてから、
「俺は……ルイス、だと思う」
ルイスは自信なさげに言う。
「皆曖昧なんだよなぁ…」
バティストは、俺たちもそうなんだ、と付け足した。
「ところで、ここはどこだと思う……？」
リリアが尋ねた。
「さあ…。少なくとも、俺等の知ってるところじゃあなさそうだな」
ルイスが言い、バティストが同意するように頷いた。

＊

『動けるか？』
とルイスが言ったのは、ほんの十分前の事。
そろそろ暗くなってきて、視界は尚悪い。

リリア達は、ベッドから抜け出して、木でできた扉を開き、外に出た。と、外では何やら準備が行われていた。
一人がリリア達に気づくと、にこにこしながらこちらに近寄ってきた。
「お目覚めになりましたか？」
女が恭しく頭を下げた。顔はにこにこしたままで。
「あ……あの、ここは、どこでしょうか？」
「ここは、フローレンスですよ」
リリアの顔に、？マークがいくつも浮かんだ。
「フローレン……ス？」
そんな名前聞いた事がない。リリア達は、絶望した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1932a/

Marionette〜操り人形〜

2010年10月28日07時52分発行